

新任期保健師が乳幼児およびその家族への家庭訪問で抱く困難感

長山ひかる^{*,1)}、三輪眞知子¹⁾、小笠原雅美²⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾浜松市役所 健康増進課

【目的】新任期保健師は母子保健を担当することが多く、子どもの成長発達を判断することの難しさや支援が困難な事例に対する関わりの難しさを抱いており、個人・家族への支援の強化が重要となっている。本研究では、新任期保健師が家庭訪問で乳幼児およびその家族への支援の中で抱いている困難感や課題について明らかにことを目的とした。

【方法】A 市で保健師として勤務してから 5 年未満の保健師で乳幼児およびその家族への支援をしている保健師 7 名を研究対象とした。家庭訪問において、支援困難を抱いた場面及び対処方法等について、半構造化面接を実施した。得られたデータは看護師と非常勤での保健師経験のある者 1 名と保健師経験の無い者 6 名に分けて質的統合法 (KJ 法) により分析した。本研究は、本学倫理審査委員会 (承認番号:24025) の承認を得て実施した。

【結果】本稿では看護師と非常勤での保健師経験がある新任期保健師 1 事例について述べる。元ラベルは 103 枚、7 段階の分析を経て最終ラベルは 6 枚となり、この 6 枚の関係を考え、【事柄：エッセンス】をつけて構造図を作成した。構造図の説明は次の通りである。新任期保健師の乳幼児およびその家族の支援困難事例の家庭訪問では、【家族へも目を配る：母親のみでなく家族にも関わる】ようにしていた。しかしその後、【行き詰る支援方法：具体的支援方法が分からず保健から福祉へ助けを乞う】があり、もう一方では、【手探りの支援方法：マニュアルや根拠のない中で成果が出せない心細さ】があった。この 2 つは相互に作用しあっていた。その結果、【関係構築する力の希求：基本的知識の定着と親との双方向のコミュニケーション能力の習得】と【アセスメントする力の希求：支援方法を振り返ることによる判断力の鍛錬】となり、二つの側面は通底していた。【達成度のあいまいさ：支援方法の習得の時期や段階や方法があやふや】は【行き詰る支援方法】、【手探りの支援方法】、【関係構築する力の希求】【アセスメントする力の希求】の根底となり、これらに影響していた。すなわち、新任期保健師は【家族にも目を配る】という視点をもちながら家庭訪問をしていた。しかし、【行き詰る支援方法】、【手探りの支援方法】に困難を感じ、【関係構築する力の希求】、「アセスメントする力の希求」となっていた。【達成度のあいまいさ：支援方法の習得の時期や段階や方法があやふや】がこれらに影響しているという構造であった。

【考察】新任期保健師は、支援方法があやふやで達成度に曖昧さを抱えていた。このため関係性の構築やアセスメント能力の向上を求めていることが明らかになった。新任期保健師に対する支援が困難な事例への関わりについて、研修プログラム開発の必要性が示唆された。

倫理審査	■承認番号 (24025) □該当しない
利益相反	■なし □あり ()